

かのりがわ  
鹿乗川流域遺跡群

**調査の経過** 二級河川鹿乗川は、安城市東部では碧海台地東端に沿って南北に流れている。この流域は台地の縁にあたり、鹿乗川及び矢作川などによって形成された沖積低地と洪積台地との境界に位置している。この沖積低地側では、氾濫や上流からの土砂の堆積、海岸線の変化などによって形成された微高地が点在しており、現況は水田として利用されていて、この中に畑地が点在し、自然堤防上の微高地には小規模な集落が形成されている。この鹿乗川において、愛知県土木部による広域河川改修工事が行われることとなった。工事予定地周辺では、安城市教育委員会による数例の調査や、昭和63年に本センターが実施した加美遺跡の発掘調査が行われており、過去の調査事例から弥生～古墳時代を主体とした遺跡が広がる可能性が考えられた。(財)愛知県埋蔵文化財センターでは、県教育委員会の委託を受け、改修工事に伴う鉄塔移設予定地において、範囲確認を兼ねた事前調査として、発掘調査を行うこととなった。発掘調査は平成10年10月～11年3月まで行い、調査面積は800m<sup>2</sup>である。

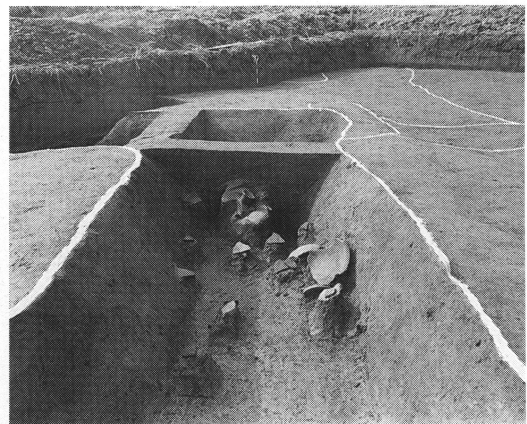
**調査の概要** 今回の調査区は、河川の拡幅工事に先立ち、現在設置されている送電用鉄塔を移設する工事が行われるため、現存する移設予定の鉄塔8基の東側にそれぞれ一辺10mの正方形で設定された。全調査区は、旧態が水田であり、耕作面の標高は最上流のA区で8.2m、最下流のH区で7.5mを測る。各調査区では、現在の水田耕作土が約0.2m入れられており、この下にオリーブ灰色、浅黄色シルトの堆積が多くの調査区で認められた。これらの下には、灰・緑灰色シルトが堆積しており、これらの層において弥生時代中期末葉～古墳時代前葉にかけての遺物、遺構が検出され、この下部の基盤層は緑灰色シルト・細粒砂であった。

検出された遺構は、土坑、溝、不定形土坑、柱穴などである。このうち土坑では、土器棺墓の可能性が考えられるもの、溝では方形周溝状にめぐるものなども認められ、時期の前後関係を含めて現在その性格を検討中である。

検出された遺物は、弥生時代中期末葉から古墳時代前葉の時期を主体とし、土器は壺、甕、高杯片が圧倒的な比率を占めている。(松田 訓)



B区全景(南西より)



A区遺物出土状態



第1図 調査区位置図 (1 : 20,000)